

人々に答ふ

正岡子規

青空文庫

歌の事につきては諸君より種々御注意御忠告を辱うし御厚意奉
 やしたてまつり

謝候。なほまた或諸君よりは御嘲笑御罵詈を辱うし

誠に冥加至極に奉存候。早速御礼かたがた御挨拶

可申上之処、病氣にかかり頃日来机に離れて横臥致しをり

候ひしたため延引致候。幾百年の間常に腐敗したる和歌の上にも、

特に腐敗の甚しき時代あるが如く、われらの如き常病人も

特に病氣に罹る事有之閉口之外無之候。

何より御答へ可申かと惑ひ候へども思ひ出すままに一つづ

つ可^{もうしのぶべく}申述候。三月十一日紙上に番外百中十首（松の山^{まつやま}人投^{びと}）として掲げある歌を、われらが変名にて掲げ候やの御尋ね有之候へども、右は^{ことごと}尽く『柿園詠草^{しえんえいそう}』中にある歌にてわれらの歌とは全く異りをり候。『柿園詠草』中の歌を何^{なんびと}人が投じて、如何にして紙上に載せられたるかは固^{もと}よりわれらの知る所には無之候。さてまたこれらの歌がわれらの歌と相似たるやに評する人も有之候由承り候に付、彼^{かの}歌に対する愚見を述べてそのしからざるを明かに致したく存候。

朝風に若菜売る児の声すなり朱雀^{すざく}の柳眉^{やなまゆ}いそぐらむ

この歌は十首中にては第一と存候。全体面白く候へども「眉いそぐらむ」の語巧たくみに失する者と存候。眉いそぐといふ事、昔よりいふか否かは知らねども、何だか変な言葉なるが上に、此処ここにこの擬人的形容を用うるはよろしからず。あるいは若菜売る児に対して、柳眉りゆうびといひたる者にも候ふべけれど、さやうなシヤレのない方がかへつて趣深く聞え申候。尋常に柳が緑になると申したく候。

暮れぬめりすみれ葦咲く野の薄月夜うすづくよひばり雲雀の声はなかぞら中空にして

この歌拙つたなく候。「暮れぬめり」とありて「薄月夜」とあるは甚

しき 撞どう 著ちやく と相見え候。「中空にして」の止まりも甚だ心得がたく、あるいは「暮れぬめり」に返る意にやとも思はるれど、さりとしては余り拙くや候べき。

行くも花かへるも花の中道を咲き散る限り行きかへり見む

かくの如き歌はあるいは俗受けよろしかるべくや、われらはただ厭味いやみたらだらに感ずるのみに候。咲き散る限りとは何の意とも知らず、もし花の咲いたり散つたりする間といふ意にて長き時間を含む者とすれば八田の「うつせみの我世の限り見るべきは」といひし類にて少しも実情らしき処なし、また時間あちに非ずして花の

中道の長さをいふものとすれば、言葉の巧を弄したるのみにて何らの趣味も無之候。しかしこの歌は全体に厭味あれば一句を論ずるに及ぶまじく候。

桑とると霞わけこし里の児がえびらにかかる夕ぐれの雨

この歌さしたる難もなけれどまた何の趣も無之候。蚕飼する時節は長閑のどかに感ぜらるる者なるに、この歌前半の長閑なるに似ず、後半は長閑に感ぜられず、これがために趣味少きにやと存候。えびらといふは如何なる物か知らねども、この歌にては桑の葉を摘み入れる筐かたみの類かと思ゆるが不審に存候。俊頼としよりの歌に「山里の

こやのえびらに漏る^も月の影にも繭^{まゆ}の筋は見えけり」とあるえびらは、家の中にある器具かと思え候へど、それを桑の葉入れにも用ゐる候にや。識者の教^{わざ}を煩^{わづら}はしたく候。

棹^{さお}ふれし筏^{いかだ}は一瀬^{ひとせ}過ぎながらなほ影なびく山吹の花

「棹^{さお}ふれし筏^{いかだ}」といふ言葉続きも「一瀬^{ひとせ}過ぎながら」の言葉続きもいと拙く覚え候。「ながら」といひて「なほ」と受けたるもうるさく、また「なびく」の語も「ゆらぐ」「動く」などに更^{あらた}め候方山吹に適切かと存候。この歌巧ならんとして言葉づかひ無理に相成候。

山里は卯の花垣のひまをあらみしのび音ねもらす時ほととぎす鳥かな

この歌尋常めきたれどもわれらは厭味を感じ候。この歌の作意は三、四の句にあるべく、その三、四が厭味を感じる所に有之候。垣かきの隙ひまがあらいとて忍ねび音を漏らす訳は少しも無之、それを両者相関係するが如く言ひなすは言葉のシヤレと相見え申候。言葉のシヤレが行はるる処にはいつでも趣味とほ乏しく候。(明治三十一年三月二十日)

蚊遣火の煙にとぎす草の庵を人しも訪はば水鶏聞かせむ
かやりび いお くいな

この歌句法ととのはず、四、五の句に至りて調子抜けが致し候。四の句「人も訪へかし」などいふが如き言葉つきに改めなば、少しは続きよかるべくやと存候。さるにても「水鶏聞かせむ」の句の俗なるはまた一段の事に候。

水鶏聞くべしとか何とか改め候はんには、少し俗気少かるべく候へども、さりとして善き歌にも成り不申候。

一むらの杉の梢こずえに山見えて月よりひびく滝の音かな

上三句は尋常の景尋常の語なれども、印象明瞭なる処かへつて
 他の巧を弄し詞をひねくりたる歌にまさりをり候。惜おしいかな四、
 五の句上に続き不申候。上三句の景より言へば山は杉林より隔りへだた
 たる者の如く相見え、さまで近きとは覚えぬに、滝の音とあるを
 見れば極めて近き山ならざるべからず、ここにおいて前後の撞著
 を来し申候。「月よりひびく」などいふ語この作者の得意の所な
 るべけれど多少の厭味は免れず候。この歌の作意は滝は見えすし
 て音ばかり聞ゆる故、月中に響あるが如くいひなしたる者なるべ
 けれど、それがかへつて厭味を生ずる種に相成候。もしあからさ
 まに見ゆる滝の下に立ちて見あげたる時、滝の上に月ありとせん

か、この場合に「月より響く」などやうの形容を用うるは厭味少かるべく候。

五百重山霧深からし菅笠いおえやま すげがさのしづくも落つる有明の月

この歌の意明あきらかならず、第二句想像の語とすれば、旅人などの笠しづくの雫を見て山は霧深からんといへるにや、さるにても言葉少し足らぬやうに存候。旅人の菅笠とでも言はざれば三句突然に出て面白からず候。「雫も落つる」の「も」の字も意味をなさず、余儀なき「も」とや申し候べき。(十首中この歌一首は『柿園詠草』中になきやうに覚え候、如何いかがの訳にや)

雲かかるわたのみなかにあら^{しお}汐を雨とふらせて鯨^{くじら}浮べり

「雨とふらせて」の句この歌の骨子にしてしかもこの歌の^{かきん}瑕瑾と存候。箇^{かよう}様な場合には「ふらせる」などいふやうな「せしむる」的の語を用うれば勢を損じて不^{おもしろ}面白^{からず}候。むしろ「鯨の噴^ふいた汐が雨となつた」と言ひはなす方よろしかるべく候。この人往々この種の句を挿^{はさ}んで雄壯なる歌をだいなしにする癖^{くせ}有之候。「笠^か置^{さぎ}山^{やま}あすの時雨^{しぐれ}をさきだてて乱るる雲に嵐吹くなり」の如きも四、五の句極めて面白しと思ふに二、三の句異様の言葉づかひなるがため興味索然と致候。かつ鯨の歌の第一句「雲かかる」の五

字極めて拙く候。かく言ひては「雨とふらせて」と照応するため
 にこの蛇足の語を加へたる痕跡こんせき歴々として余り見つともなく候。
 かつ「海の真中に雲がかかる」といふことは聞えぬ言葉つづきと
 存候。びようびよう渺々たる空間、渺々たる海上にある雲を「かかる」と
 はいふべからず候。縦よしそれも許して置いた処で「雲かかる」と
 いへば一片の雲と見ゆる処いと可笑おかしく候。試みにこの歌の景を
 想像可被なざるべく成候。海は漫々として広く空は一面に晴れわたりたる
 処に、海の真中に鯨しお汐を噴けば、その鯨の真上ばかりに一塊いっかいの
 雲ある処を描き出だして、それが天然の景と見え可申候や。われ
 らには人間がこしらへた雲とよりは相見え不申候。いつそ雲はな
 い方がよろしく、もしくは雲の掩おおひひろごりたる処を詠よむがよろ

しく候。(三月二十二日)

三

前に挙げたる十首の歌を意味はそのままにて、言葉つきを全く改めて投書したる人（しもうさぼんちようし下総凡調子）有之候。この人の直し方は、極めて尋常に直したる者なれば、われらが非難したる言葉つづきの無理と厭味とを免れたれど、多くは平凡に流れ申候。その二、三を挙げんに

おもしろく雲雀ひばりさひづる中空に月影見えて日は暮れにけり

言葉つづきは安らかになりたれど善き歌ともならず。

隅田川堤の桜咲き匂ふ花の下道行きかへり見む

到底厭味を脱却する能あたはずと相見え申候。

山里の卯の花垣の夕月夜しのび音ねもらす 時ほととぎす 鳥す かな

平凡になりたれどかへつて原作の細工を施したるにまされりと
存候。

五百重山朝霧深み旅人の小笠の雫間しづくなくちるなり

「旅人の」の五字を加へたるは賛成に候。結末なほ飽き足らぬ心こ地致候。こち

あおうなばら青海原沖さけ見ればあらしほを空にいぶきて鯨浮べり

「雨とふらせて」「雲かかる」の二句を除きたるは至極賛成なるが、これも結末に今一步と思ふ所なきにもあらず候。さはいへどこの歌一番の出来かと存候。

或人ある（八王子みたむらげんりゆうし 三田村玄竜子）曰く強き歌には強き調を用ゐ、

弱き歌には弱き調を用うといふもさる事ながら、『古今集』の如く同一の調にて千態万状を詠みたるもまた面白しと存候。云々。

答へて曰く、御説一理なきにもあらず、されどそは『古今集』

の如き文字の巧を弄したる俗調の上にはいふべからずと存候。歌

にていはば万葉調、俳句にていはば曠野調あらの、詩にていはば『詩しきよ

経う』とか何とかいふ、極古ごくき調の上において始めてしか申すべ

きにやと存候。極めて古雅なる調を以て詠む時は、雄壮なる事も

さほどに雄壮に聞えず、優美なる事もさほどに優美に聞えず候へ

ども、その代りすべ凡ての物を古雅化して些さの俗気を帯びざる処に一

種の面白みあり、故に万葉調を以て凡百の物事を詠まんとならば

大体において賛成致候。さりながら古今調を以て詠まんとならば大不賛成に候。殊ことに『古今集』を目して千態万状を詠みある者かの如くいはるるは心得ず候。われらの目より見れば『古今集』は一態一状を詠みたる者かと怪しまるるほどに候。

或人（同）曰く蕪村派ぶそんはの俳句集と盛せい唐の詩集とを並べたるは不倫と存候。云々。

答へて曰く、この不倫とは唐詩を以て勝まされりとなす者と存候。さて如何にして不倫とは言はるるやらん。もし詩と俳句とは詩形に長短あり、従つて規模に大小あり、故に比すべからずとならば異論も無之候へども、技倆の上に大差ありとの事ならば御同意難いたしがたく致候。李杜りとおうもう王孟おうもうの如き詩人を、蕪村時代の日本に生れて俳

句を作らしめたりとも、彼らが蕪村より遙はるかに立ちまさりたる技倆ありとも信じがたく、蕪村をして盛唐に生れしめなば、一屁へツ鋒ほこ詩人にて終りたらんとも信じがたく候。乍しつけないながら失敬 俳句を十分に研究せずして、蕪村の句も月並宗匠の句も大同小異位に思はるるには無之候哉や。歌よみが歌を天下第一の如く思ふと同じく、詩人が詩を天下第一の如く思ふも珍しき事にはあらず。なるべく公平の御論ごろんを願はしく候。或人自ら屑屋くずやと名のり「屑籠くずかごの中よりふと竹たけの里さととびと人の歌論を見つけ出してこれを読むにイヤハヤ御高論……」などといふやうな調子にて、長々とひやかされたる処、誠にひやかしに妙を得たる人もある者かなと感服致し候ひしに、何がさて最後に歌論中のただ一箇処に對する長々しき攻撃有之、し

かも屁の如き攻撃に勢も何も抜け申候。その要領をいへば「躬恒みつねの心あてに折らばや折らむの歌を、竹の里人は知るまいが、白菊に霜置けば赤くなるものぞ。躬恒はその赤くなりていづれを白菊とも分ちかねたる所を詠めるなり。物知らぬ奴やつが歌など解するはかたはらいたし」などといふにあり、誠に以て驚き入りたる解釈に候。われら庭前の白菊も年々赤くなり、歌にも白菊の紫にうつろふよし詠めれば白菊は赤くなるものと兼ねて承知致しをり候処、屑屋先生の今更高慢に説明せらるるを見れば、遼りょうとう東はくとうに白頭いのかこの豕を珍しがりたる如く、屑屋先生は白菊を余り御覧なされぬ者と相見え候。さてまた「置きまどはせる」といふ語が色の変つた意に取れ可申哉。またその色の変つた菊を、

心あてに折らばやなどと仰ぎようさん山に出掛けて躬恒が苦心して折らんとしたるにや、笑止とも何とも申様がなく候。如何に理窟好ずきの躬恒でも斯かよう様な説を聞いたらさぞかし困り可申候。屑屋が躬恒の弁護などするは鼻ひいき尻の引倒しにや候べき。(三月二十四日)

四

ちばとうじようし
千葉稻城子ちばとうじようしに答へて曰く、
撞どうちやく著ちやくと誤解の事なほ誤解あるが如し。われらが撞著といひしは前に「客観的景色に重きを措き」とありて後に「客観的にのみ」とありしをいふなり。即ち「重きを措き」は「のみ」と断言したる後の言と意味同じからざるをい

ふ。

「国歌さへ知らぬ文学者」とは暗にわれらを指したる者か、われら実に国歌を知らず、慚愧ざんきに堪たへず。されどわれらをして国歌を知らしめざる者、半ばわれらの罪にして半ば国歌の罪なりと信ず。何となればわれら国歌を研究せんとして歌集を繙ひもときしことしばしばなるも、何時いつも四、五枚位読みては最早眠気さして読み得ぬまでに彼らはつまらぬなり。凡およそ文学的の書は読みはじむれば知らず覚えず読み進むものなるに、独り歌なる者に至りては義務的に読まんとしてさへ、容易に読みがたき者、その趣味少きと変化なきとによらずんばならず。いはんや国歌を知らぬ者われらのみにあらず、いはゆる歌よみなる者も多くは国歌を知らずと思はる。

彼らにしてみてもし国歌を知る者ならば、国歌の陳腐を感じざる訳なければなり。彼らは三代集と近世歌人中の一、二の家集位を讀みて、学者と心得をると見えたり。歌よみに學問させたくは思へども、歌以外の學問や外國の文學杯などを勧めたとて効力もあるまじければ、せめては日本の歌集だけ通讀してもらひたき者なり。われらの如く頭から歌を陳腐に思ふ者は、幾冊讀みてもますます陳腐と頭痛を感じるのみにて、何の結果もなければ、彼陳腐な歌かのを作りて自ら喜ぶ歌よみをして、『古今集』以下の勅撰集ちよくせんしゅうを始め、代々の歌集をつづけさまに讀ましめば、まさかに陳腐を感じざるを得ざるべし。

理窟と感情との密ひそかに相關係するは前にもいへり、今更繰り返す

を用ゐず。ただ「歌にあらず」といふ事につきて一言せん。固よ^{もと}り歌と歌ならざる者との境界は画然と分れたる者に非ざれば、論理的の嚴格なる意味を以て「これは歌なり」「これは歌にあらず」と断定するは、歌非^{かひか}歌中間の歌にありては最も難^{かた}し。殊^{こと}に普通に歌を評する場合にありては「歌にあらず」の語を誇張的に用うること多し。即ち悪歌を指して爾^しかいふなり。なほ悪人を指して「人でなし」などといふが如し。故にこの両者を區別するを要す。またわれらが理窟は歌にあらずといふも大体の論にして、一字一語の理窟めきたる者ありとてそれを直ちに「歌にあらず」（嚴格なる意味の）といふにあらず。もし嚴格にいはば毫^{ごう}も理窟なき者は歌なり、全く理窟ばかりなる者は歌にあらずと断言すべし。さ

れどその中間の者にありては、何処どこまでを歌とし、何処どこよりを歌とせずと、その限界を議論的に説明するに由なし。実地に或ある製作をとらへて感情にてこれを判断するあるのみ。試みにこの間の事を言ひ得るだけ言はば、一分の理窟あれば一分だけ歌ならざる方に近づき、二分の理窟あれば二分だけ歌ならざる方に近づくとでもいはんのみ。しかしそれすら極端に推論せられては過誤を生ずべし。例へば一分の理窟ある製作は、些さの理窟なき製作に比して、一分だけ劣れりなどと推論せらるるが如し。大体においてはこの推論に誤あやまりなけれども、実地に当りて見れば必ずや多少の除外例を生ぜん。極ごく簡単な理窟を含む歌にて善しと思ふ者あり、些の理窟を含まざる歌にて悪わるしと思ふ者あるは事実なればなり。もし理窟

といふ語を広き意味に解すれば解するほどこの除外例は多くなる道理なり。（理窟の意義に広狭ある事は「あきまろに答ふ」る文中にいへり）「我身一つの秋にはあらねど」の歌下二句には理窟を含めり。されどこの歌を以て直に「歌にあらざ」ただち（厳格なる意味の）とはなさず。但ただしこの歌が幾分か歌ならざる方に近づきをるは論を俟またず。

われらのいはゆる理窟に、理窟なりや否やの疑うたがありとの事なれども、理窟なりや否やは知識上の事なれば疑問となるまでの価値なし。（文学として許すべき理窟なりや否やこそ常に疑問となれしかれどもわれらの用うる「理窟」なる語が適当なりとか不適當なりとかの疑はあるべし。それならば文字は如何様に変へてもよ

ろし。ただ語を以て意を害する莫^{なか}れ。(三月二十九日)

五

文学の標準といふ事につきての論要領を得ず。「科学的定義を完全し」云々の語あれども、文学の標準に必ずしも科学的定義を附するに及ばず。また完全なる標準とかいふ語あれども、完全なる標準と不完全なる標準とは何に因つて區別するか。子は文学の標準なる語を全く誤解せり。また「英仏独の文学者すらも」云々の語あるは日本^{びいき}最^{びいき}頂^{びいき}の人の言葉とも覚えぬ。子は英仏独の学者が^な為し得ざりし事を日本人は為し得ずとするが如し。われら敢て自^{あえ}

ら矜ほこるに非ざれどもそれほどまでに西人を崇拜しをらず、それほどまでに日本人を輕蔑しをらず。誤解する莫なかれ、われらは子の如き西人崇拜にあらず。

文学の標準とわれらの言ひしは何もむづかしき事にあらず。詩文を見、絵画彫刻を見て美なり美ならずと評するは、その評者の胸中に「文学美術の標準」あり、それに因りて評するなり。われらの言ひし文学の標準といふ者これのみ。即ち英仏独の文学者にもそれぞれの標準ありしなるべく、支那の文学者にもまたそれぞれの標準ありしなるべし。子にも標準あるべし。われらにも標準あるなり。ただ古今東西に通ずる標準と言ひしを以て誤解を來たせるが如し。文学の標準といへば古今東西に通ずる事は言はでも

善かりしなり。既に標準といふ、古の歌を評すると今の歌を評するにいにしえよりて相異なるべくもあらず、東洋の歌を評すると西洋の歌を評するにいにしえよりて相異なるべくもあらず。古今東西に通ずるとはこの事なり。千人万人の標準が一定せりなどといふにあらず。西洋や支那の「文学」といふ語の定義などを並べたるは全く無用に属す。何となれば古人のいはゆる文、文学なる者はわれらのいはゆる文学とその程度区域において相違ある者多きのみならず、全く意味を異にする者さへ少からず。支那にて文を道の意に用うるが如きこれなり。その根底において意味の異なる文の定義などを掲げて、駁撃はくげきせんとするは見当違ひたるを免れず。われらのいはゆる文学は理窟の外に立つ者にて道をさい載する者などに非ざる

なり。われらのいはゆる文学はわれらがしばしば説明するが如きをいふなり。もしこれも文学といふ語が当らぬとならば美文となり言ふべし。字の定義などを説くは枝葉に渉るわたの嫌きらあればここに説かず。

文学は実用と娯楽とを兼ねたりとの説固もとよりわれらの説と異なり。(実用の語は普通の解釈に従ふ) 理学にして文学に属すべきものありといふ事ならば、子のいはゆる文学はわれらのいはゆる文学と異なる事いよいよ明かなり。实用即ち教訓を垂たるといふに至りて益 筋路の異なるを見る。普通の場合にては教訓的の者は文学の範圍外にあり。されどかかる者をも文学といふとならば子の勝手なり。他人これを如何いかんともする能あたはず。ただわれらのい

ふ文学と性質を異にすといふことを明言し置くに止めん。とど

「優艶天地を撼かす」といふ語少ちと変な語なれども、その意を察するに優美なる事をいふならん。支那の語にて優美なる詩が天地を撼かすとはいふまじと思へど、それも言葉咎とがめに類すれば言はず。ただ特に優とか艶とかいふ字をここに出だしたるは、かりそめの思ひつきなるべきも、和歌の弊風を自ら現したる者なり。歌よみは歌を優美に詠めよといふ、甚だしきは優美ならざるは歌にあらずとまでいふ者もあり。これ歌の腐敗したる一原因なり。われらをして言はしめば歌を詠むには優美にも詠め、雄壯にも詠め、古雅にも詠め、奇警にも詠め、そうちよう 莊重にも詠め、軽快にも詠めといはんとす。ここに用ゐし語は深き意味なしとするも、歌が一

般に優とか艶とかいふことを離るる能はざりしは事実なり。

「国歌の人を鼓舞して忠誠を貫かしめ人を劇げき奨しょうして孝貞こうていを

竭つくさしめ」云々「豈あにただ翅たばに花を賞し月を愛めで春霞おもいに思やを遣り風鳥

に心を傾くる」云々の数行、文章も変だが議論も変なり。和歌が

人を鼓舞し云々したる事もたまにはありしかも知らず、されどそ

は文学に多くあることにあらず。まして和歌の如く無気力なる者

においてありさうにもなき事なり。「無味の感念」などいふ語奇

妙な語にしてちよつと解しかぬれど、何だか花月を愛するを誹そしり

たる者の如し。われらは花月を賞する上には趣味多し、教訓的の

事には趣味すくな少しといふ説なればとにかく大反対なり。(四月一日)

六

「国歌は国歌として独立し」などとは訳の分らぬ言葉なり。「俳句は俳句として独立し」ともいふべきにあらずや。独立とは他国文学の影響を受けぬといふことか知らねど、和歌に漢語を用うるは前にも言へるが如し。思想の上にも多少漢学仏教の影響を受けたるは事実なり。それでもなほ日本固有の処があるとの意味かも知れねど、その固有の処が極めて価値なき者ならば、なかなかにはづかしくて独立などといへた義理に非ざるべし。維新前後の歌などに残つてゐる日本固有の部分は、その価値なき者ならんと思ふなり。

「文人読者をして新思想を抱かしめ、知らず識らず旧思想を嫌悪けんお否定するに至らしむるの用意なかるべからず」とは手段の緩かんきゆ急うをいへるなり。われらは必ずしも「知らず識らず」的の緩手段をのみ取らんとは思はず。知りて改むる人もあるべしと信ずるを以てなり。

外国の文学思想を輸入すべしといふ事、外国の文学を剽窃ひょうせつせよといふにあらざ。剽窃にあらざして輸入する事、歌人の腕次第なり。外国文学より得たる思想にても、日本歌人の脳中に入りて、それが歌となりて再び出づる時は、その思想は日本化せられをらざるべからず。既に日本化せられたる者は日本の思想なり。天真の桜花の、人造の薔薇そうびのといふ譬喻ひゆはかたはらいたし。桜花

をのみ無上にありがたがりて、外の花の美を知らぬ人とは、共に
美術文学を語りがたし。

ある 或人（秋田県樺園子）かえんし 曰く、万葉の歌は十中八、九まで世道人
心に関係あれば善し。古今以後の歌は徒いたずらに月を賞し花を玩もてあそぶ。故
に取らず。云々。

答へて曰く、かくの如き事は前にも度々たびたび言ひたれば、今更繰
り返すもと思へどなほ少しいふべし。歌は世道人心に関係ある故
善きにあらず。世道人心に関する歌にて善きもあり悪あしきもあり。
歌は花月を弄もてあそびたるがために悪きにあらず。花月を弄もてあそびたる歌に
て善きもあり悪きもあり。万葉の中には「田子の浦ゆうちいでて
見れば真白にぞ不ふ尽じの高嶺たかねに雪はふりける」「わかしの浦しおに汐満ち

くればかた瀟をなみあしべ蘆辺をさしてたづ鳴きわたる」などといふ歌ありて、人も名歌とし、われらも爾しか思へり。されどこれらは世道人心に何らの関係もなきなり。善を勧め悪を懲こらし、人を教へ人を導くは道歌に如しく者あるまじ。されど道歌なる者は総じてつまらぬ者なり。

また『万葉集』を評して「歌は国家治教の道なるにより、当時の人は思のままを述べたる者なり」などといへるは一文章の内既に撞どうちやく著あり。国家治教とかを目的として歌詠まんには、思のままには詠まれぬ訳なり。思のままに歌詠みたらんには、国家治教などいへる事に関係なき歌も出来る訳なり。実にや万葉時代の人は、思のままを詠みたれば、国家治教などとは似てもつかぬ歌

を多く詠みいでたるなり。

一般にいへば、歌は倫理的善悪の外に立つ処に妙味はあるなり。俗世間の渦巻く塵ちりを雲の上で見てをる処に妙味はあるなり。倫理いたずらは徒に善を勧め徒に悪を懲らす傍かたわらにありて、歌は善とも悪ともいはず、ただかくの如く愉快にかくの如く平和なる場所あることを黙示するなり。世間は名利はしに趨おほり煩惱ぼんのうに苦しめられ、掌しょうだい大だいの土地の上に氣違ひの如く狂ひまはるを、歌人は独ひとりこれを余所よそに見て花に遊び月たわむに戯れ、無限の天地に清浄の空氣を吸ひをるなり。彼俗人かのだちが歌を善悪の間、俗界の中に求むるはそもそも誤れり。(四月二日)

七

「ものふの八十やそうじ氏川の網代木あじろぎにいぎよふ波のゆくへ知らずも」
 の歌を前に八田などの歌と共に挙げてかにかくと論あげつらひしかば、八田などの歌と同じさまに誹そしりたりと思はれたるにや、これを難ぜらるる人多し。この歌を八田などの歌と同じ様に見たるにあらざることはその時の文にも記し置きたれど、言葉足らざれば意通ぜざりけん。故に今改めて彼かの歌を例に引きたる訳を申すべし。

世の歌よみに『万葉集』を崇拜する人あり、『古今集』を崇拜する人あり。いづれも一得一失はあるべけれど、大体の上よりはわれらは『万葉集』崇拜の方に賛成するなり。しかし『万葉集』

崇拜家なる者は、多く万葉の区域（否、むしろ万葉中の或部分）を固守して一步もその外に越えざるを以て、歌に入るべき事物材料極めて少く、ために吾人が感得する諸種の美を現すこと能はず。これわれらが万葉崇拜家に不満を抱く所なり。故に万葉崇拜家が常に手本として示す所の「もののふの」の歌を取りてことさらに云々したるなり。

美に簡單なる美あり、複雑なる美あり。世の文学者あるいは複雑のみを以て美となす。われら取らず。人あるいはわれらを以て複雑の美をのみ好むと為す。これ誤解なり。われらは簡單の美をも好み複雑の美をも好む。しかれども簡單の美を詠みたる歌は、複雑の美を詠みたる歌の如く、多く出来ざる事は数において明な

あきらか

り。例へばここに十箇の材料ありとせんに、これを一首に一箇づつ用ゐて歌を作りなば十首を得るのみなれど、二箇づつを用うれば九十首を得べく、三箇づつを用うれば九百首を得べく、四箇づつを用うれば九千首を得べき割合なり。かつ簡單なる美には趣味の少き物を詠むに不可なれども、複雑なる者には趣味の少き物も、趣味多き物と配合して用ゐる場合多し。また趣味のなき者とある者とを、ことさらに並べて反映せしむる事もあるべし。かたがた以て複雑的の者は多く出来得べく、簡单的の者は多く出来得べからざる理なり。しかるに和歌なる者は、千年来常に簡單の美のみ現さんと務めたるを以て、終つひに重複ついでまた重複、陳腐また陳腐となりをはりたり。（これ歌の陳腐に流れたる一大原因なり）

「もののふの」の歌たけ高く詠まれたる由は前にもいへり。われらは ひとまろしゅう 人丸集 中にこのたけ高き歌あるを喜ぶなり、『万葉集』中にこのたけ高き歌あるを喜ぶなり、日本文学の中にこのたけ高き歌あるを喜ぶなり。しかれどもこの歌は趣向の最もつとも簡単なる者なり、簡単に傾きたる和歌の中にも殊ことに簡単なる者なり。そのたけ高きもこの簡単なる処にある者なれど、さてこれを手本として歌を作らんには、さらでも陳腐なる歌のいよいよ陳腐ならん事を恐るるなり。この歌の如き調に倣ならひたるは後世にありては恋歌に最も多し。

ほととぎす鳴くやさ月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするか

な

吉野川いは波高く行く水のはやくぞ人を思ひそめてし

春日野かすがぬの雪間を分けて生おひ出づる草のはつかに見えし君かも

の如きを初はじめとして、どの集にもこの集にも、かくの如き詠み方の恋歌は沢山に見ゆる故に、われらが見ると同じ歌を幾度も繰返して出したかと思ふばかりに陳腐とはなれり。しかしここに注意し置きたきは、われらが今論じつつあるは陳腐と否との論にして、雅俗の論にあらずといふ事なり。もし雅俗の点よりいはばこの種

の歌は歌の中の雅なる者に属し、殊に恋歌の中の雅なる者に属す。恋歌には俗なる者、理窟ツぽき者多き中に、この種の恋歌は俗を脱し理窟を離る、右に挙げたる三首の如きはむしろ恋歌中の佳作なるべし。されど陳腐と否との点よりいはば（古今集時代即ち右に挙げたる歌の如きはいまだ陳腐ならず）後世に至るに従ひ、この種の歌ほど陳腐なるはあらず。われらの歌を評するには、第一に俗なる者は俗としてこれを斥け、しりぞ第二に俗ならざる者の中にて、陳腐なる者は陳腐としてこれを斥く。ここに論ずる者陳腐の一点にあり。（名所としての「もののふの」の歌は次に論ぜん）

（四月四日）

八

「ものふの八十やそうじがわ氏川の網代あじろぎ木に」の歌に、名所の特色を現さずといふ事につきて、或人ある弁じて曰く、網代は宇治田上うじたがみに限りたる者なれば特色なきに非ずと、網代が宇治の特色なることはわれらも知れり。されどこの歌は宇治川も網代木も、皆宇治川網代木その物を現はさんとの意にはあらで、単に下二句の感慨を引き出すための道具に過ぎざれば、名所の歌の手本にすべきに非ずといへるなり。言はば「山川のゐくひにかかる白波のゆくへも知らぬ」といひても、隅田川の百本杭といひても善き様なる処なれば、この歌を以て宇治川を詠じたる者とはなしがたし。

或人曰く、この歌の初三句意味なしとはいふべからず、「ものふの」とある故下二句に利くなり。それはさる事もあるべし。さりながら「もののふの八十氏」といふ意味の語、初になくともなほこの歌は善く聞ゆるにやと覚ゆ。如何いかや。

或人曰く、名所の特色いちじるく現れをらずとも、その名所を過ぎて詠みたる歌ならば差さ支しつかえなかるべしと。この説には異論

なし。ただ名所の特色なき歌を、名所の歌の手本として人に教ふるの不可なるをいへるなり。この「もののふの」の歌の如きは名所の歌としてはむしろ変例に属す。因ちなみにいふ、名所といふ事について、古来歌よみは大なる謬びゅうけん見見を抱抱き抱たり。昔の歌よみは、いはゆる名所なる者を一度も見ずしていい加減に歌に詠み

込む者なれば、その名所の歌といふも多くはその地の特色を現し
 たる者に非ず、ただ古歌に拠りてどこそこは千鳥の名所なり、ど
 こそこは山吹の名所なりといふに過ぎず。さればその地に千鳥が
 啼かずとも、その地に山吹が咲かずとも、固よりそれらに頓著あ
 るべくもあらず、甚しきはあるかなきか分らぬやうな名所を、平
 氣に用ゐて澄ましてゐたるのんきさ加減は驚き入りたる次第とい
 ふべし。尤も主観的の歌の引合に名所を用うるは知らぬ処にても
 差支なかるべけれど、いやしくも客観的に詠む場合、即ち景色を
 詠む場合には、その地を知らざれば到底善き歌にはなるまじ。あ
 るいは古歌古書に拠り、あるいは人伝ひとつてに聞き、あるいは絵画写
 真にてその地の大概を知りたる後、これを歌に詠む事はなきにあ

らねど、それすら常にする事にあらず。それを京都の外一步も踏
 み出さぬ公卿くげたちが、歌人は坐いながらに名所を知るなどと称して、
 名所の歌を詠むに至りては乱暴もまた極まれり。かくの如きは古
 今以後和歌が堂どうじょう上じょうにのみ行はれたる弊にして、和歌が堂上どうじょうに
 盛さかんなりし一事は、名所の歌のみならず、総すべての歌を腐敗せしむる
 一原因とはなれり。されどこは公卿の罪にあらずしてむしろ在野
 の人の罪なり。在ありまろ満まろらが和歌は堂上の専有物に非ずと大呼する
 までは、在野の歌よみは皆堂上方に屈伏して自分を軽蔑しむたり
 しなり。真淵・在満など出でてより後、和歌の権は公卿の手を離
 れたるも、その弊習はなほ全くこれを払ひ去る能はず。蒿こうけい蹊けいが
 『勝地吐懷篇しょうちとかいへん』の凡例はんれいの下に「はた地理は知らでもよみうた

にさはりなしといふは世の常なれど、たとへば或る名所集からさき辛崎の条下に、朝妻あさづま読よみ合あわせとばかりかけるをみて、いとまぢかき所のやうに読みし人あり、辛崎は比叡ひえいの東阪本にて志賀郡、浅妻つくまは筑間に隣りて坂田郡か、湖を中に隔てあはひ十里余やあらん」云々と書けるは、幾分か空想的名所歌の弊を看破したるには相違なけれど、さりとして名所を知るはこれらの誤ご謬びゅうなからしめんがためのみにはあらざるべし。誤謬なしとて特色なければ名所の歌にはあらず。

附けていふ、前稿に歌の数を計算する処に錯列法さくれつほうを用ゐしはわれらの考へ誤りたるなり。改めて順列法に因りたる計算を記さんに、二箇づつを用ゐたる歌の数は四十五首、三箇づつを

用うれば百五十首、四箇づつを用うれば三百七十五首となるなり。
 （四月七日）

九

或^{ある}人曰く、子の歌は子の歌にてやるが善けれど一々古歌を打ち毀^{こわ}すは不服なり。云々。

答へて曰く、「旧思想を破壊し尽し」など前に言ひし故、あるいは誤解を来せしかも知らず。この旧思想といふは『古今集』以後今日までに行はるる理窟ツぽき思想、陳腐なる趣向などを指したるにて、総^{すべ}ての古歌の想を含みたるにあらず。われらが作る所

の歌は固もとより歌の一部分と見てもよろしく、半部分と見てもよろしく、これらの外に万葉調の歌にて善き者も出来でべく、古今調の歌にて善き者も出来べく、将はた古人の調にもあらず、われらの調にもあらざる一種の新調にて善き歌も出来べく、決してわれらの歌に非ざれば歌に非ずなどといふ狭い量見は少しも持たず。しかし古人の歌でも名家の作でも理窟ツぽき思想、陳腐なる趣向はあくまで非難を試みるべし。

或人曰く、古来、歌といひ来りたるは子の作る所の如き者に非ず。されば子の作る所は一種特別の者なれば、歌といはずに、何とか外の名を用ゐては如何。云々。

答へて曰く、面白き事を承る者かな。われらは歌といふ語を拝

借してもよろしからんとの考にて、歌と言ひ来りたるも、それが悪あしとならば如何にも名づけ給はるべし。俳諧歌となりと、狂歌となりと、味噌みそとなりと、糞くそとなりと思ふやうに名づけられて苦しからず。われらは名称などにかかはらざるなり。されど言葉の遊びを主とする『古今集』の俳諧歌と、趣味を重んずるわれらの作とは、根底において同じからざるを忘れたまふな。地ぐちシヤレを喜ぶいはゆる狂歌と、地ぐちシヤレを擯ひんせき斥するわれらの作と、立脚地を異にする事を忘れたまふな。それを承知の上でなら、何とでも名づけ給はるべし。

或人曰く、われわれが梅が香かを鼻に感ずる上は、それを歌に詠まれぬ訳はあるまじ。云々。

答へて曰く、固より梅が香を歌に詠まれぬといふ訳は少しもなけれど、余り陳腐なる歌多き故、前に戯ざれごと言を放ちたるなり。趣味あるやうに、陳腐ならぬやうに詠まば、梅が香も好題目なるべし。

或人曰く、漢語にても俗語にても、構はず用うる事になれば、無学なる者が、飛んでもない歌をうなり出すやうな弊害を生ぜざるか。

答へて曰く、弊害までを考へらるるはよほど深切な考なれども、われらはそんな事を考へずとも善かるべしと思ふ。弊害は固より起るべし。僅わずかに一ヶ月を過ぎたる今日にてすら、飛んでもない見当違ひの歌は、いくらもわれらの几辺きへんに飛び来るを見る。されど

弊害は何処どこにもある事なり。従来の如く歌を詠むには、多少古語を学ばざるべからざる時代においては如何。歌よみは文法だの語格だの詠み方だのと、から威張りに威張り、ひた拘こたわりに拘りて、無趣味なる陳腐なる歌のみを作りしにあらずや。漢語や俗語を用ゐて、それで善き歌を作り得べしとの見込あらば、何処までもそれを用ゐることを勧むるが当然ならん。飛んでもない歌が出て来たらば、飛んでもない歌として斥しりぞけんのみ。

或人曰く、真淵を評して存外万葉の分らぬ、などとは片はら痛し。万葉を崇拜しても万葉を模せざる所が、真淵の真淵たる所以ゆえんなり。云々。

答へて曰く、これも鼯ひいき肩の引き倒しには非ざるか。真淵が万葉

以外に一派を立てた（一派といひ得べきか否か知らず）のはえらしとするも、その一派なる者が万葉より劣りたる者ならんには、何の取得とりえかあるべき。われらは真淵の歌は万葉に劣れりと信ず。むしろ万葉を模倣したらば最もちつと善き歌を得たらんかと思ふなり。故に彼は万葉の味を解せぬかと疑ひしなり。右は短歌の上なれど、長歌に至りては真淵は万葉を模したり。従つてその値打短歌の上にとわれらは思ふ。難者の如きは真淵の長歌を以て短歌に劣れりとなすにやあらん。しからばわれらとは全く見様を異にするなり。（四月十二日）

十

或人ある（玄竜子）曰く、盛唐の詩集と蕪村派の句集とを並べいふことの不倫と申したるは、勝劣の心にはこれなく、につかはしからず類せずなむとの意にて、比較その当を得ざるなり。詩形とやらむ、規模とやらむ、技倆とやらむを云々するに非ず（略）おのれは晩唐諸家の文学に近きやと臆おぼろげ気ながら見受け申候。不倫と申すこと、要は蕪村一人の仕じゆうを盛唐幾多の作家と比擬ひぎすること、及び晩唐の方にはかへつて比擬すべき作家あらむと思ひ、云々。

答へて曰く、われらは蕪村の句を以て盛唐諸家の仕に似たりといひし事なし。「蕪村派の俳句集か盛唐の詩集か読ませたく」といひしのみ。かくいひし意は、歌の無趣味にして字句のたるみた

る弊を救はんには、蕪村派の俳句集を読むが善かるべしとの考に
 て、特に蕪村派の俳句を挙げたるは、その最も趣味に富み字句し
 まりをる点において、他派の俳句に勝るを以てなり。その盛唐の
 詩集といひたるも、またその趣味に富み字句しまりをるがためな
 り。されど蕪村派の俳句の趣味と、盛唐の詩の趣味と同じといふ
 にはあらず、蕪村派の俳句のしまりぐあい工合と、盛唐の詩のしまり工
 合と同じといふには非ざるなり。また蕪村の俳句はむしろ晩唐に
 類似を見るとの説も当らず。蕪村と似たる詩人を求むるに、殆ど
 似よりたる者を見ず。もし蕪村時代の俳句界に似たる者を求むれ
 ば、清初しんしよの詩界最もこれに近かるべし。諸家輩出せし処、詩想
 の精細になり婉麗えんれいになりながら、俗に墮おちざりし処などやや相

似たり。されど蕪村を以て清初の誰に比すべきかと問はば、似たる者を見出だす能はず。

或人（稲城子）曰く、詩聖ホーマーの如きも単に美を愛せりとするか、美にして善なるものを愛せしにあらざるか。云々。

答へて曰く、美にして善なるも善し。美にして善悪の外に立ちたるも善し。われらはホーマーの詩を知らず、果してホーマーの詩は終始「善」を離れざるか。ホーマーの詩「善」を離れずとするも、われらはホーマーに倣なまらはんと思はず、われらは善悪の外に美を認むればなり。われらはプラトーンが真善美とやらを説いたからとて、それに従はざるべからずとは思はず。われらの美と信ずる所は、ホーマーもプラトーンも如何いかんともする能はざるなり。

附けていふ。これらの事を嚴密に論ぜんとならば、少くとも「善」の字の定義を定めざるべからず。もし天下の事物をことごと尽く善悪の二に分つといふが如き論ならば格別、普通に用うるが如く、善悪は人間の行為を評するの語とせば、天然物は善悪の外に立つ者なり。天然物既に善悪の外にあらば、天然物を詠む詩歌にして、善悪以外に立つ者多きは当然の事なり。西洋の詩は東洋の詩に比して天然を詠ずる事少き故に、西洋人の論には、善と美とを一つにするやうの事をいふ者多きにやあらん。西洋人の論なりとて、一も二もなく崇拜するは固より愚者の事、論ずるに足らず。いはんや西洋とてことごと尽く同一の論のみには非ざるをや。

或人（同）曰く、足下そっかの理窟として排斥するものはこの善なるべし。しからは足下はこの倫理的の思想を棄すてて、美の一方より歌をよむべしと強ふるものなり。吾人ごじんの感情をすてて、自然の美を求めよと教ふるものなり。しからは吾人歌を詠まんとして、先づ詠むべき趣向を考へざるべからず。云々。

答へて曰く、何らの誤解ぞ、何らの愚論ぞ。われらの理窟とする所は前にしばしばいへり、今更理窟と善とを一つにするとあきは呆れ返りたり。われらの美とする所は倫理的善悪にかかはらず、故に美は善悪の外にありても多く存在す。されど美にして善なる者なしといふに非ず。善なる者は美に非ずといふに非ず。何が故に善を排斥すといふか。少しにても善を排斥せんとしたることあら

ず。排斥せんとするは美ならざる者のみ。縦令たとい「善」なりとも美ならずんば固よりこれを排斥するなり。「倫理的の思想を棄すてて美の一方より歌をよむべし」とは半ばわれらの意を獲たり。但し「強ふる」にはあらず。美の感じなき者に歌を詠めとはいはぬなり。「吾人の感情を捨てて、自然の美を求めよと教ふ」とは訳の分らぬ言葉なり。自然の美を感じずるも感情なり。感情を捨てて自然の美を求むべきやうなし。あるいは「倫理的感情を捨てて」の意か。それにしても「自然の美を求めよ」といふはなほ誤れり。われらは自然の美のみ取りて人事の美を捨つる者に非ざるなり。

(四月十七日)

十一

ある
或人（春園子）曰く、意匠即調と云ふ意味を解し得ざるが如
き、云々。

（駿すんだい台小隠しょういんに代りて）答へて曰く、調といふ語は古来種々の
意義に用ゐる来れりといへども、意匠いしょうといふ語と同じ意義に用ゐ
たる例はあるまじ。調はむしろ意匠に關係なき音調をいふが適当
なり。その音調といふ事が、縦よし意匠といくばくかの關係ありと
するも、それは意匠の極小部分との關係なるべく、決して意匠即調
といふを得ず。意匠は同じことにても、言ひやうによりて、調の
高くなる事も卑ひくくなる事もあるなり。

或人（同）曰く、文学豈^{あに}独り階級あるを免れ得んや（略）画においては本画と浮世画、詩においては歌と俳句と、皆これ同じく社会に必要な美術文学なり。しかしてまたその間各品格の差あるは免るべからざる事実ならずや（略）馬糞^{ばふん}を詠み、焼芋^{やきいも}を詠みたる俳句は縦^た令^{とい}文学としては貴重すべき価値を有するともその品格は遂^{つひ}に高貴なる精神を養ふに適せざるが如し、云々。

答へて曰く、文学美術にも品格の差ありといふことは異論なし。品格の善きといふことは、普通に事物のゆるやかなる^{せま}逼らざるやうな事をいふ。三十一字の歌の調は、十七字歌の調よりもゆるやかなる故、三十一字の方が品格善しといはば先^まづ可なり。馬糞を詠み、焼芋を詠みたる俳句云々といふを以て、俳句の品格を論ぜ

んとするは誤れり。馬糞焼芋を詠みたる俳句の小品なるは、俳句その物の小品なるにあらずして、馬糞焼芋の小品なるがためなり。三十一字歌を如何に上品とするも、馬糞焼芋を詠みたらば小品なること俳句に劣るまじ。また和歌は俳句に比して上品なりといふも、極^{ごく}大体の比較にして、實際一首一句の品格は、その意匠材料音調の上に係る者多し。歌の小品なる者と、俳句の上品なる者とを比較すれば、俳句は歌よりも上品なり。世人俳句を知らず、俗間伝ふる所の俗宗匠の句を以て俳句と為す、故に無下に小品なる者とのみ思ふなるべし。^{こころみ}試に芭蕉^{ばしやう}時代蕪村時代の俳句を読み、必ずや思ひ半^{なかば}に過ぎん。また文学の階級といふ語は不穩当なり。上品下品の意ならば品格の高下などいふべし。文学の階級といは

ば品格のみを標準とすべきに非ず。(高貴なる精神を養ふに適せずとは解しがたし。思ふに筆到らざる者ならん)

或人(同)曰く、俳句は下級にあるだけ不自由も少く、範圍も広きは理の正まさにしかるべき所にして、感化力を社会の下層にまで及ぼさんとの必要は、品格を下したる所以ゆえんならずんばあらず。云々。

答へて曰く、これまた前と同じ誤ご謬ゆうに陥れり。されどその事は前に弁じ置きたれば言はず。感化力を社会の下層にまで及ぼさんとの必要は、品格を下したりとはいたく誤れり。俗宗匠が附点選抜を以て糊口ここうとなさんとするには、感化力を下等社会に及ぼすの必要あるかも知らず。芭蕉・蕪村らが俳句を作るに、種々の俗

語漢語を用ゐる新材料を用ゐて自由に詠みたりとて、そは下等社会を感化せんともあらず、また自ら下等社会の人間なるが故に俳句を作るといふにもあらず。俳句を作るは俳句の美を感じたるが故なり。俗語漢語新材料を用うるは俗語漢語新材料の美を感じたるが故なり。下等社会と何らの関係もなきなり。歌よみは世間知らずにて、何でも和歌を本尊に立つる故^{へきけん}見多し。和歌が堂上にのみ行はれたるが如きは、文学界の^{へんしやう}変象なれども、歌よみはそれを正当と心得たるにやあらん。和歌は長く上等社会にのみ行はれたるがために腐敗し、俳句はとかく下等社会に行はれやすかりしたため腐敗せり。われらは和歌俳句の堂上に行はるるを望まず、和歌俳句の俗間にて作らるるを望まず。和歌俳句は長く文学

者の間に作られん事を望むなり。(四月二十七日)

十二

或人(春園子)曰く、歌は俳句の長き物なり、俳句は歌の短き者なり、三十一文字なるが故に歌にして、十七文字なるが故に俳句なりと思ひ誤り、詩形即字句の外に各異なれる節あることを知らざるの輩、到底共に詩を談ずるに足らざるなり。云々。

答へて曰く、歌俳両者は、必要上その内容を異にしたりと論の、^{もう}妄なることは既にこれを言へり。されば歌は俳句の長き者、俳句は歌の短き者なりといふて何の故障も見ず、歌と俳句とはた

だ詩形を異にするのみ。しかれども論者の論の出づる所を思ふに、今までの歌と俳句とが上品下品の差別ありとするに基因せるならん。なるほど大体において歌は俳句よりも上品なるべけれど、論者の思へるが如くは歌も上品ならず、俳句も下品ならざるなり。論者は前に糞、焼芋といふ例を挙げたれど、焼芋の句は古俳書に見当らず、糞小便等の句は其角きかく・蕪村などに一、二句あるのみ。決して糞の句などは俳句に多き者といふべからず。ひるがえ翻つて歌の上にこれら下品の材料ありやなしやと見るに、やはりこれあるを見る。しかも論者の崇拜する『万葉集』には糞、かわや廁などを詠み込みたる歌あるにあらずや。上品下品をいはば、糞も廁も下品なるには相違なけれど、さりとして歌の可否を言はば、『万葉集』の中に

もこの糞や厠の歌に劣りたる歌あげて数ふべからず、いはんや万葉以外の歌をや。そはとにかくに糞の歌も、厠の歌も、犢鼻禪ふんどしの歌も、腋毛わきげの歌も、瘡かさの歌も歌として書に載せられをる事實は争ふべきにあらず。歌必ずしもことごと尽く上品ならんや。

或人（同）曰く、歌は歌ふといふことを旨むねとして調ふべき事、これまた吾人は万葉の歌に依て断ずる者なり云々。万葉の歌は言葉を練り、品格高く調ふるを専らとし、これを第一義となし、思ひを述ぶるといふ方は、第二義となしたる者ぞ。これ歌ふ者なればなり。しかるに世くだつて、いつしかこの定義は破れにけり。故に後世の歌は専ら思おもを述ぶるといふ方に傾きて、言葉調などいふ事は思を述ぶる材料に過ぎざるやうに成りゆきて、歌は長く衰おとろ

へにけり。云々。

答へて曰く、こは大間違なり。歌の歌ふべきことはいふまでもなし。^{いにしえ}古の歌を歌ひしのみならず、今の歌も歌ふなり。日本の歌を歌ふのみならず、支那西洋その他あらゆる国の歌は皆歌ふなり。歌ふ者なればこそ五言六言七言などそれぞれの調子もあれ、歌はぬ者ならば何しに字数 ^{ひょうそく}平 仄 を合すべき。しかるに古の歌は歌ひて、今の歌は歌はずと思へるは間違なり。^{ただし}但歌ふ調子は古と今と異なるべし、同時代にても人によりて異なるべし。(調子の事は他日詳論すべし) また万葉は調または言葉を主とし、後世の歌は想を主とすといへるも間違なり。万葉の歌に想を主とせる者少からず。否万葉の歌は思ふままを詠みたるが多きなり。万葉の調

の高きは、多少練磨の功なきに非ざるも、むしろ当時の人いまだ後世の如き卑ひくき調を知らず、ただ思ふままに詠みたるからに、かへつて調の高きを致ししならん。『古今集』以後に至りては、詩想なる者漸ようやく陳腐に帰し、ただ言葉の言ひかけ言ひまはしをのみつとめて無趣味の者を作れり。即ち言葉を練るといふ事は、万葉時代よりも多くして、想の方は万葉時代ほどに変化せざりしなり。論者の論あべこべなり。

或人（同）曰く、漢土においても詩と歌とは確然定義を異にし、詩は志を述べ歌は言を永ながうしといへるなり。しかるに何事ぞや、その志を述ぶるを定義とせる詩に訓くんして唐歌からうたといひたるは、これやがて歌ふを旨とするなるわが国の歌を、誤りて、漢土の詩と

同じく志を述ぶるものとなせるなり。云々。

答へて曰く、あまりの事に答へんすべも知らず。論者は支那の「詩」と支那の「歌」と如何なる差違ありとするか。日本の「ウタ」と支那の「歌」と如何なる類似ありとするか。支那の「詩」は志を述ぶるのみにて歌ふ者にあらずとするか。日本の「ウタ」は歌ふ者にして「心を種と」する者にあらずとするか。歌はぬ「詩」、心から出ぬ「ウタ」が世の中に成り立つべしとするか。明治の世に生れてかかる言をいはるるやうでは、チト頼もしからぬなり。今少し奮発して勉強せられては如何いかん。「歌」の字の事はここに弁ずるまでもなし。宣長のぶながの『石上私淑言』いそのかみのさざめごとを見るべし。

或人（同）曰く、歌ふを旨とすると、思を述ぶるを旨とすると、詩旨ししにおいても詩形においても、自らその趣を異にすべきは当然の理義なるが故に、云々。

答へて曰く、前にもいふ通り、歌はぬ歌もなく、思を述べぬ歌もなければ、両者は全く一致して分つべき者にあらず。もし両者その一を欠けば歌とは言はぬなり。されば特に歌ふを主とすといふ歌もなく、思を主とすといふ歌もなきはずなり。但世人ただしは緩くゆる歌ふを指して歌ふといひ、詩想複雑にして音調また変化するを指して思を主とすといふにやあらん。（五月三日）

ある
或人（鳴雪氏）曰く、和歌が古来より人を感動せしめたる例
すくな
少しとの説は誤れり。和歌が人を感動せしめたる例枚挙に違あら
ず。あるいは一首の和歌のために命を助かり、領土を帰されしな
どを始めとし、しばしば猛きものたけのふを動かしたること歴史伝説
の上つまびらかに詳なり。子がその例少しといふは、子自ら感動する歌少し
との事なるべし。云々。

答へて曰く、誠にしかなり。古来人を感動せしめたる例はいく
らもあれど、その歌が余りつまらぬ歌にて、歌といふ名を与ふる
さへいかがと思ふばかりなれば、それらをば余の考の中へ入れざ
りしなり。余の考の中に入るべき歌にて、人を感動せしめたる例

を尋ぬるも、ちよつと思ひあたらざりける故、例少しと言ひ放したる者にて、余り粗漏そろうなる書き様さまにぞありし。総すべて和歌俳句詩など人が人を感動せしむる事は、必ずしもその和歌などの善きがために非ずして、相手（感動する人）とその場合とに因る者なり。相手が極めて趣味低き者ならんには、趣味低き歌はこれを感じせしむる事あるべきも、趣味高き歌はかへつてこれを感じせしむる能あたはず。いはゆる大声は俚耳りじに入らざる者なり。猛たけきもののふの心を和やわげなどいへど、猛きもののふといふ者、多くは趣味卑ひくしき者なれば、彼らを感じせしめたりといふ歌は、趣味卑く取るにも足らぬぞ多き。またその歌は歌として取るに足らず、従つてその歌の善きを感じたるに非ざるも、その作者が意外に歌など作りしと

いふ事、あるいはその歌がその場合に善く適合せりといふ事のた
 めに人を感じしむる者あり。例へば こしきぶのないし 小式部内侍が大江山の歌の
 如き、歌としてそれほど値打もなければ、歌を得え作らじと思ひ
 し人の即座に作りしと、その歌がその場合に善く適合したるとの
 ために人を驚かしたりと覚ゆ。また太田道灌おおたどうかんが歌を作りて「か
 かる言葉の花もありけり」と誉ほめられたるが如き、歌の善き事が
 人を感じしめたるよりも、むしろ意外の人が歌詠みたりとの一事
 は人を驚かしたる者ありしなるべし。さだとう 貞任れんがの連歌よしいえに義家がそ
 を追はずなりたりといふ事、むねとう 宗任が梅の花の歌を詠みて公卿くげた
 ちを驚かしたりといふ事など杯、事実の有無は疑はしけれど、もしこ
 の種類の事ありとせば、前者はきほどき場合に能よくつらねたりと

いふ事に感じ、後者は思ひがけなき東夷あずまえびすの風流に感じたるに
外ならじ。故にかくの如き歌は、後人のこれを見るにもその場合
を聯想してこそ幾多の興味はあれ、単独に歌として文学上より批
評を下さば、三文の値打もなき者比々ひひこれなり。されば人を感じ
しめたる歌は、必ずしも善き歌に非ずして、かへつて悪歌拙歌を
多しとす。これら歌人ならざる者の場合を除きても、歌人などが
贈答送別の歌に感じたる例少からず。されどこもその歌がその場
合に適切なるがために多く感じたるにやあらん。縦よしその人は自
ら感じたる歌を善き歌と思ひたりとも、他の人必ずしもそれを善し
とは思はず。余らは伝説に残りたる「歌人の感じたりといふ歌」
を見て、感動すること少く、かへつて普通に知られぬ歌にて非常

の感動を生ぜしむる者多し。

以上述べたる場合、即ち或時或人に限りて感動したる場合を除き、何時いつにても誰にても感動する歌を見るに、なほ余は多くこれを浅薄と認めざるを得ず。その例として最多数の日本人を感動せしむる力ありと信ずる

敷島しきしまの大和心やまとごころを人間はば朝日に匂ふ山桜花

の歌を見るに、余は毫もこの歌に感動せられざるのみならず、なかなか浅薄拙劣なるを見る。全体の趣向も平凡なれども、かくこの趣向の平凡に聞ゆるは、いくばくかこの歌を見馴なれ聞き馴れ

たるにも因るべければそは論ぜず。縦よし平凡なる趣向なりとも、調子高く歌ひなばかへつて高尚なる歌となるべきを、この歌はまた無下むげに拙つたなくつらねたる者にぞある。その大欠点は「人間はば」の一句にあり。上に「人間はば」とあらば、下に「と答へん」と置かざるべからず。「と答へん」の語なければ「人間はば」の語、浮きて利かず、従ひて厭味を生ずるなり。されど天下多数の人が感動するは、この平凡にして解しやすき趣向と、この厭味ある言葉（人間はば）の働きとにあるべく、宣のぶなが長の作意もまたここにあり。宣長の詩趣の解し加減と、天下多数の人の詩趣の解し加減と、あたかも一致してこの大喝かっさい采を博せり。大喝采的の作必ずしも可ならざるなり。余もかつてこの歌に感じたる時代あり。

されど数年間文学専攻せんこうの結果は、余の愚鈍をして半歩一步の進歩を為さしめたりと信ず。少しく文字ある者は都々逸どどいつを以て俚野りや唾すべしとなす。しかも賤妓治郎せんぎやろうが手を拍つて一唱三歎いつしやうさんたんする者はこの都々逸なり。いやしくも詩を作る者は雲井竜雄くもいたつお、西郷さいごう隆盛たかもりらの詩を以て、浅薄露骨以て詩と称するに足らずとなす。しかも書生が放吟し劍舞し、快と呼び壯と呼び、彼らをして怒髮どはつ天を衝かしむる者は、西郷・雲井らの詩ならざるべからず。やや美文を解する者は、山居士ちゆざんこじの抜刀隊の歌を以て、粗雑鹵莽ろそつ取るに足らずとなす。しかも兵士が挺身肉薄敵城を乗り取らんとする時、彼らの勇気を鼓舞する者は、抜刀隊一曲の歌ならざるべからず。大喝采的の作は概ねかくの如し。彼らは平易にして趣味低き

を要す。或時は露骨に叙し、或時は一種厭味の裝飾を用うるを要す。語を更^かへて言はば、多数素人へのあてこみは少数黒^{くろうと}人の最も厭忌^{えんき}する方法を取らざるべからず。黒人の婉^{えんきよく}曲にいへといふ処はこれを露骨にいひ、黒人の露骨にいへといふ処は、これに厭味ある形容^{なほ}杯を加へ、しかして後にあてこみ的大喝采的の作は成る。これ従来の大喝采的の作なり。故に余はむしろ大喝采的の作といふ一事を以てその卑俗を証せんとす。しかれどもこは過去の事実のみ。未来においてもかくの如くならざるべからざるか否かは疑問に属す。もし文学的趣味を具有して、大喝采を博する者あらば、これを以て彼^{かの}非文学的の作に代へんこと、けだし歌人の職務なるべし。(五月十二日)

(明治三十一年三月一五月)

青空文庫情報

底本：「歌よみに与ふる書」岩波文庫、岩波書店

1955（昭和30）年2月25日第1刷発行

1983（昭和58）年3月16日第8刷改版発行

2002（平成14）年11月15日第26刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：網迫、土屋隆

校正：米田

2010年8月18日作成

2011年5月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人々に答ふ

正岡子規

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>